

夫が悲痛告白

26

「なぜ妻は死なななければ いけなかつたのか」

享年23

婚姻届を手にして、幸せそうな表情を浮かべる新婚カップル——しかしそのわずか8日後、ふたりの運命は暗転した。享年23。また年若い新妻は、夫が発見した時、すでに新居のアパートで亡くなっていた。なぜなのか。真相を究明する夫が声を絞り出すようにして告白する——



セブ産院で中絶手術。執刀したのは“無資格”の医師だった。そして新婚たった8日——



「エリサベートルム」という名の特別室

「おしいちゃん、おはあちやんになつても、手をつないでいられる夫婦でいたいね」

そう約束していた新婚夫婦の結婚生活は、わずか8日目で突然終わりを告げた。

「あんなひどい病院とわかつていたら、妻に手術は受けさせなかつた」

目を調べて語るのは、田中真人さん（26才・仮名）。田中さんの妻・由美さん（23才・仮名）は都内の産婦人科病院で手術を受けた6日後、急死した。結婚と出産

という人生の喜びに包まれていた夫は、愛する妻と生まれてくるはずの子供を一挙に失った。
若く、幸せいっぱい夫婦に何が起こったのか——

田中さんは、学生時代にアルバイト先で出会った2才年下の由美さんと交際を始めた。明るく朗らかな由美さんの人柄に魅かれた田中さんは、大学卒業後に北関東から上京してからも遠距離恋愛を続けた。16年6月、交際5年の記念日を前に由美さんの妊娠が発覚した。「そろそろ結婚を」と考えていたふたりは喜び、迷わず入籍と出産を決めた。「彼女は、女の子がいいな」と嬉しそうに言っていました。結婚式と出産はどっちが先がいいかな。なんて、ふたりで話もしていたんです」（田中さん）
由美さんはネットで調べて、

評判のよかった東京・武蔵野市にある水口病院での出産を決めた。

同病院の個室は、天蓋付きの「お姫さまベッド」やヨーロッパ調の家具を完備。接客のプロである「医療コンシェルジュ」が患者のニーズに応え、退院前は院内でフルコースのフレンチデイナーを味わえる。何度もメディアに登場する豪華な「セレブ病院」に、初めての出産を控えた由美さんの心がときめいたのだらう。



水口病院の医師による安全な中絶手術



交際4年目の記念日にお台場でデートしたときのふたり。

「妊娠初期の中絶手術では、子宮内に器具を入れて胎児を掻き出したり、吸引したりします。手術時間は10〜15分と短いですが、手術後、子宮に傷をつけてしまい、感染症などになるリスクがある。静脈性の全身麻酔によるアレルギーの可能性もあります。正直、お産を手掛ける産婦人科医はあまりやりたがらない手術です」(都内の産婦人科医)

命がある段階で行う。大きなショックを受けた彼女に田中さんは、「次に元氣な子を産めばいいよ」と声をかけるのが精一杯だった。

「手術を終えて帰宅した妻は、腫脹としていて、お腹が痛い。と訴えて家事もできませんでした。その後も体調は回復せず、横になって休む日が続きました」(田中さん)

「中絶の手術は、患者の後ろめたさなどからトラブルが明るみに出ないことも多い。今回の件は、誰にでも起こり得ると考えられます」(前出・産婦人科医)

「中絶の手術は、6000件に達する。中絶手術が原因で由美さんが死亡したかどうかの因果関係は不明だ。水口病院は「現時点では、本件事件と急死の因果関係はないものと考えている」と説明している。

「中絶の手術は、6000件に達する。中絶手術が原因で由美さんが死亡したかどうかの因果関係は不明だ。水口病院は「現時点では、本件事件と急死の因果関係はないものと考えている」と説明している。

とかトイレの外に出し、心臓マッサージを繰り返したが、由美さんが息を吹き返すことはなかった。

「医師が行った中絶手術は業務上過失罪に相当」

田中さんは失意のなか、さまざまな手段で妻の死の手がかりを探し求めた。「病歴もなく健康だった妻がなぜ突然、死んだのか」疑問はどんどん大きくなった。そして、浮かび上がったのが、水口病院で受けた医療の信じられない実態だった。

「刑法は原則として堕胎を禁じています。中絶手術は妊娠の継続や分娩が、身体的あるいは経済的理由で母体の健康に危険がある場合など限られた要件のみで認められており、そうした趣旨を充分理解する指定医が手術を行うことが望

中絶と死亡の関連を検討した形跡もありません。東京都では9日、指定医ではないにもかかわらず中絶手術を行っていた医師が同病院でA医師のほかに2人いたと明らかになった。これについて水口病院に質したが、「患者様への対応を優先していますので、回答の時間が取れません」との理由で回答は得られなかった。

「都がきちんと指導していれば事件は起こらなかった」水口病院は52年に開院。04年に初代院長の義弟であるC氏が理事長代行に就任したのを機に、女性スタッフからなる「経営管理室」を発足させる。病院の持合室や受付ホールをオール・デコ調に改装し、現在に至るセレブ病院の礎となった。

ましい。人工中絶手術は、一定の技能や知識を持ち、研修を受けた医師でないリスクがあるということも「因です」(厚生労働省母子保健課)

「医師免許取得後5年以上経過し産婦人科の研修を3年以上受けたもの」

「指定医でない医師が人工妊娠中絶を行うことは、法が禁止する墮胎行為であり、法律上許されません。A医師が行

田中さんに提出した報告書には、理事長の名前はなく理事長代行としてC氏の名前がある。C氏は医師資格を持っていない。医療法46条の6第1項によれば、医療法人の理事長は原則として医師か歯科医師に限られる。人命を扱う医療において、医学知識のない者が責任者となり利益を追求すれば、深刻な問題が生じる恐れがあるからだ。

「理事長不在の期間、実質的にはC氏が病院運営を主導していたとみられます。そうした組織運営の問題点が、指定医ではない医師が何度も中絶手術を行っていたこと、背景にあるのではないかと考えられます」(中川弁護士)

「経験豊かな医師による安全な中絶手術」と書かれていたが、出産記念に病院で食べられるフルコースも紹介されている。



「水口病院は12月6日、A医師が由美さんを含めて12件の人工中絶手術を行った事実を認めた。A医師が指定医ではないことを認識していたとし、「認識不足、認識の甘さを痛

「水口病院の最重な処分」

「東京部が不適切な病院運営を長年放置した原因究明と再発防止策の公表」

「ほぼは大切な妻を失い、生きる意味をなくしました。それでも、水口病院や東京都の数々の不祥事が明らかになった現在、なぜ、妻が死ななければいけなかったのかの真相を知りたい。ただ、それだけの思いなんです」